

『お父さんお母さんと私はがんばりました』

西九州大学健康栄養学科教授 横尾美智代

昔、あるところに若い夫婦がいました。なかなか妊娠しないお母さんは、一日も早く赤ちゃんが授かることを願いながら、不妊治療を続けていました。ちょうどその頃に、街では風しんが流行していました。風しんの初期は風邪とよく似ています。周囲はもちろん本人でさえ、自分が風しん患者なのかわかりません。早く病院へ行くか、赤い発疹でようやく気づくのです。若いお母さんは、風しんに罹ってしまいました。バスや電車、スーパーですれ違った誰かが風しん患者だったのかもしれませんが。そしてちょうどその頃、妊娠がわかったのです。嬉しいながらも若い夫婦は不安でした。妊娠初期に風しんに罹った母親から生まれた子どもは、生まれながらに健康に問題があることを多いことを知っていたからです。若いお母さんは悩みながらも出産、可愛い女の子が誕生しました。生まれた女の子は目が見えず、耳も十分には聞こえず、心臓にも問題がありました。たびたび熱を出したりミルクを上手に飲んでくれなかったり、さらには成長の過程で、何度も大きな手術を経験しなければなりませんでした。医師から何度となく余命宣告を受けながらも、女の子はとうとう高校生になりました。ところが卒業を目前に控えたある日、突然体調が悪化、入院先のベッドの上で亡くなりました。18年の生涯でした。呼吸が止まる1時間前に女の子は書いた文章があります。『お父さんお母さんと私はがんばりました』。若い夫婦が自分にたっぷりの愛情を注ぎ慈しみ育てくれたこと、お父さんお母さんといっしょに精一杯生きたことを最期に書き残して、女の子は亡くなりました。

あの時、風しんが流行っていなければ。あの時、予防接種制度が整っていたならば……。だれもがそう考えてしまいます。しかし若い夫婦は過去を振り返るのではなく、前に進むことにしました。風しんで辛い思いをする家族がいなくなるように、風しんの予防接種を推進するという『風しんをなくそうの会 hand in hand』の立ち上げです。学会会場でのロビー活動、講演会、シンポジウム、政治家へのレクチャー等、日本全国を飛び回って活動は世論を動かし、自治体を動かししました。現在、多くの都道府県で成人向けに風しんの予防接種（無料）が行われています。佐賀県も例外ではありません。

予防接種で防ぐことができる感染症があります。「知らなかった」ではなく、積極的に情報を収集し、接種してください。それは、自分自身のためでもあり、周囲の人々を守るためでもあり、これから生まれてくる子どもたちを守るためでもあります。

